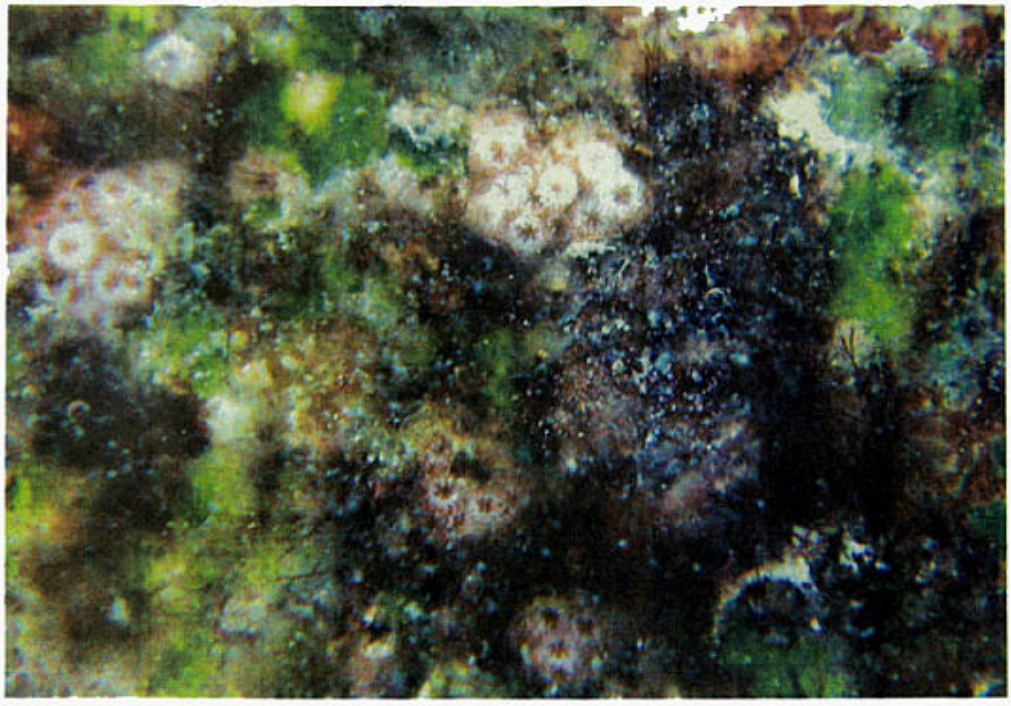
沖縄タイムス　2002年（平成14年）10月23日　水曜日

サンゴ着生に成功

阿嘉島臨海研とテトラ総技研

世界初　卵から100個の群体に

那覇新港沖



那覇新港の沖合で実施されているサンゴの一種ミドリイシの着生実験

で、阿嘉島臨海研究所（座間味村）とテトラ総合技術研究所（茨城県）の研究チームは二十二日までに、海底に沈めたコンクリートブロックに約百個のサンゴの群体が成育していることを確認した。

テトラ総合技術研究所は「移植は成功。ブロックの形状などをさらに工夫し、三年以内をめどにさんご礁の再生技術を確立したい」としている。

研究チームは今年五月末、阿嘉島周辺の潮目で採取された受精卵約二百万個を幼生まで飼育、沖合一・五キロの防波堤内にシートで囲んで設置されたほ場に放流した。遠隔地で採取した受精卵を利用したさんご礁回復の試みは世界初。

数ミリ程度に成長した幼リプはブロックの斜面や側面で約百個が着生し、一部は石灰質の骨格を作り出している。しかし、相次ぐ台風接近の影響で、海砂が覆うなどの被害が発生、着生しやすいブロック上では確認ができなかった。

同港近海のサンゴは、四年前の白化現象でほぼ壊滅しているという。

同研究所の綿貫啓環境・生態研究部長は「那覇港がサンゴが育つ環境にあることが分かった。砂が積もらない形状を考案するなどし、研究を進めたい」と話した。

着生して、ポリプの群体に成育したサンゴ　那覇新港沖合